

2026年5月12日

近畿労働金庫
理事長 宮崎 正 様

「2025年度近畿ろうきんNPOアワード」選考結果報告書

2025年度近畿ろうきんNPOアワード審査委員会
審査委員長 阿部 匡伴

「2025年度近畿ろうきんNPOアワード」審査委員会の選考結果について、以下のとおり報告いたします。

1. 審査について

2025年12月1日から2026年2月2日までに応募があった62団体の応募書類をもとに、各審査委員が事前審査を行い、4月17日に開催した審査委員会において各受賞団体を選考しました。

選考の結果、審査委員会にて、50万円コースを3団体、10万円コースを6団体とすることを確認しました。審査委員は下記、記載のとおりです。

【審査委員】（敬称略）

- 審査委員長 阿部 匡伴 （近畿労働金庫 近畿推進会議 議長）
- 審査委員 岡田 智恵 （公益財団法人 コープともしびボランティア振興財団 事務局長）
貫名 茜 （特定非営利活動法人 ホッピング 理事長）
東中 健悟 （近畿労働金庫 地域共生推進室 室長）

なお、応募団体の理事・監事に就いている審査委員は、その団体の審査からは外れることとしておりますが、該当する審査委員は存在しないことを確認しております。

また、山縣 文治氏（大阪総合保育大学 児童保育学部 特任教授）は、当日欠席となりましたが、「2025年度近畿ろうきんNPOアワード」審査委員会指針第5条に基づき、委員会が成立していることを確認しています。

2. 受賞団体の決定にあたって

2025年度の応募数は62件（50万円コース、10万円コースあわせて）となりました。

応募内容の特徴として、代表やメンバー当事者の経験をもとに、問題意識が明確で、社会課題の捉え方や課題へのアプローチ・視点が具体的で、現場の状況を反映したものが多く見受けられました。

また、不登校・引きこもり支援活動や障がい児の支援活動に、スポーツや文化・芸術のプログラムを組み合わせた内容など、スポーツ・文化芸術分野の申請が増えていることも今回の特徴と考えます。

審査は、応募プログラムの「先進性」「創意工夫」「社会性」「実現性」「効果と発展性」

「共感と市民参加」「資金計画の妥当性」「新規チャレンジ性」の項目に加えて、応募団体の「組織の継続性・運営体制・活動歴」や「市民主体性」の項目も基準とし、選考しました。

「50万円コース」では、多くの審査項目で高い評価を受けた3団体を選定し、「10万円コース」では、実現性、社会性、継続性、市民主体性、新規チャレンジ性などで高い評価を得た6団体を選定しました。（※各受賞団体の応募プログラムの内容や審査講評は、次ページ以降をご確認ください）

なお、受賞団体は幅広い分野からの選定となり、それ以外の団体についても、子育て支援に関する課題に対する取り組みへの熱意は受賞団体に匹敵するものでした。

3. 今後の提言として

「近畿ろうきんNPOアワード」は、働く仲間の教育ローン利用が、子どもたちの未来と地域の子育て支援につながる仕組みをめざして、公募型の助成プログラムとして2006年度から実施され、これまで204団体に総額4,506万円の助成金をお届けしました。

応募プログラムは、いずれも社会的ニーズにもとづいた切実なものばかりで、「子育て支援」は勤労者にとって共通する社会課題であり、とりわけ、働く仲間の暮らしを支える「ろうきん運動」に相応しい事業であると考えています。また、62団体もの応募があることは、地域課題に懸命に取り組まれている団体にとってこの制度が、「期待されている」ことの表れであると考えます。

審査委員一同として、社会にも評価されている「近畿ろうきんNPOアワード」を、「組合員の、ろうきん利用をとおして地域の課題に対応するNPOを応援する事業」として継続いただくことを強く要請する次第です。

また、会員推進機構とともに事業を進める「ろうきん」として、各会員組合に対して、地域のNPOを応援するプログラムを数多く実践されていることを、より分かりやすく丁寧に伝えていただきますようお願いいたします。

※次頁以降の「団体の活動内容」および「応募プログラムの内容」は、応募団体からの申請書の内容にもとづき掲載しています。

～50万円コース<3団体>～

■NPO 法人 ファザーリング・ジャパン関西（兵庫）

父親が繋がり学ぶ「井戸端コミュニティ」を核とした家庭自走化と子育て支援事業

“家庭自走化”の実現を目的とした、父親コミュニティ主導型の包括的子育て支援

<p>団体の活動内容</p>	<p>当団体は、2010年5月に「NPO法人ファザーリング・ジャパン」の関西支部として立ち上げ。関西一円で父親支援の講演会・イベントなどの活動が拡大したことを受け、2013年4月に兵庫県の認証を受け独立。</p> <p>「笑ろてるパパがええやん」を合言葉に、父親の育児・家事参画を促進するため、関西一円で子育て講座やイベント・ワークショップを展開。父親向け講演会、パパスクール、絵本ライブ、父子遊びなど、多様なプログラムを提供している。自治体・企業との連携を進め、父親同士のつながりづくりや地域の子育て支援体制の強化にも取り組んでいる。</p>
<p>応募プログラムの内容</p>	<p>本プログラムは、父親の孤立や子どもの体験格差などの「孤育て」課題に対し、家庭が安定して機能し続ける“家庭自走化”の実現を目的とした、父親コミュニティ主導型の包括子育て支援である。</p> <p>中核となる「パパの井戸端コミュニティ（オンライン）」では、「パパ家事育児ネタ50」や「パパファイル」などのモデルに触れつつ対話と情報交換を行い、継続的なつながりをつくることで、父親の孤立を防ぐ。</p> <p>さらに、親子参加型の謎解き探求イベントをとおした子どもの主体性や協働性を育むことによる家庭内対話の促進、「パパのためのリスキリング講座」（FJK認定講師による）をとおした、男性育休、教育資金、パートナーシップなどの実践的知識の提供、による学びの行動変容につなげることとしている。</p>
<p>審査講評</p>	<p>本プログラムは、男性の育児休業取得率が過去最高に達するなど、父親が子育てにかかわることが特別なことではなくなりつつある一方、父親同士が経験や悩みを共有できる場や家事育児を学ぶ機会が依然として限られており、意欲がありながらも孤立感や不安を抱える父親が直面する課題から企画されたものである。</p> <p>父親同士が継続してつながることができるコミュニティ形成による孤育て防止、子どもの主体性・協調性の育成、地域に根ざした父親ネットワークの定着、をめざしたプログラムであり、先進性、社会性の観点から高く評価した。</p>

■NPO 法人み・らいず2（大阪）

体験を通じて生活スキルを育む、子どもの自立支援プログラム

家事や金銭管理、対人関係などの体験により、生活スキルを身につける機会の提供

<p>団体の活動内容</p>	<p>当団体は、創業メンバーが大学在学中に障がいのある方とそのお母さんとの出会いがきっかけとなり、ガイドヘルパーのボランティアサークルとして設立。2001年にNPO 法人み・らいずを立ち上げ、2020年にみ・らいず2に名称変更。障がいや不登校、生活困窮、ひきこもり等の背景を持つ子どもや若者が、自分らしく地域で暮らせる社会をめざしている。</p> <p>「遊ぶ」「暮らす」「育む」「学ぶ」「働く」「描く」の6つの視点に基づき、様々な課題のある子どもたちを対象に、居場所の運営や学習支援、就労トレーニングを実施。学生・ボランティア100名以上が活動し、子どもたちの身近な存在として成長を見守っている。</p>
<p>応募プログラムの内容</p>	<p>本プログラムは、当団体の居場所に通う子どもを対象に、将来の自立した地域生活に必要な生活スキルを体験的に取得するプログラムである。</p> <p>具体的には、①宿泊体験をとおした家事や役割分担の学び、②希望する大学・高校のオープンキャンパス参加をとおした将来の「暮らし」を具体的に描く、③運動会・栽培体験の実施、④地域の祭りへの出店による、実践体験、⑤テーブルマナー講座、将来を考えるワークショップを通じた、複雑な生活技能や対人スキルの習得、などに取り組むこととしている。</p> <p>各イベントでは学生ボランティアが主体的に運営を担い、振り返りを言語化することで子どもたちの成長を可視化するとともに、この活動を通じ、自己表現や他者尊重、失敗を否定しない文化を築くこととしている。</p>
<p>審査講評</p>	<p>自立した地域生活には、家事、金銭管理、対人関係、交通機関の利用など生活スキルが不可欠であるが、現状では不登校や経済的困難を抱える家庭の子どもは、制度や支援の枠組みだけでは日常生活に即した実践的な経験が十分に行き届いていない。</p> <p>本プログラムでは、体験活動を通じて生活スキルを身につける機会を提供し、成功だけでなく失敗も肯定的にとらえ、生活リズムを整えながら、小さな「できた」を積み重ねることで、自立への一步を踏みだし、将来を主体的に考える力を育むことを目的としている。</p> <p>計画的な事業の実施、年間をとおしたステップアップが見込めること、多くの学生が関わっていることなど、継続性、実現性、先進性、社会性の観点から高く評価した。</p>

■NPO 法人コミュニティ・スペース sacula (京都)

地域団体と育む子ども若者の体験格差解消や自己実現の場づくり

地域資源を活用し、子ども若者やその家族と地域のつながりづくりをめざすイベントの実施

<p>団体の活動内容</p>	<p>当団体は、「平日 20 時まで親がいない」「土日に行くところがない」等の声に応え、公民館や高齢者施設等、地域資源を活用した子ども食堂を 2017 年より実施。居場所事業・相談サポートを通じて、事業実施には公的機関や民間団体、地域との協働や信頼関係の構築が必要不可欠であることから NPO 法人化した。</p> <p>主な活動は以下の通り。</p> <p>① 子どもの居場所 子ども食堂（平日夜、休日日中）、放課後スペース、フリースペース、トワイライト・ショートステイなどの実施</p> <p>② 若者の居場所 平日夜のご飯会、休日日中、深夜の居場所の実施</p> <p>③ 相談サポート ソーシャルワーカー、カウンセラーによる相談、居住サポート、就労サポートの実施</p> <p>④ コミュニティカフェの実施 レンタルスペースと子ども若者への無料カレーの提供（9 時～22 時）</p>
<p>応募プログラムの内容</p>	<p>本プログラムは京都市内の子ども若者の居場所活動団体の横のつながりづくりと、子ども若者自身やその家族と地域のつながりづくりめざしたイベントを、地域資源を活用して実施するものである。</p> <p>企画・運営は子どもの居場所や子育て支援団体有志による実行委員会形式で行い、子ども若者が実現したいイベントを考え、広報や当日の運営までスタッフがサポートを行い、地域で活動する疑似体験をとおして、地域に親しみを持つことができるようにしている。また、子どもがブース出展を手伝うことによりイベント限定の通貨を手にし、イベント内で使用できるようにすることで、経済的理由で参加できないなどの「体験格差の解消」をめざすものである。</p> <p>様々な企画・運営を通じて、子ども若者と地域がつながるとともに、子ども若者自身の成功体験による自己肯定感の向上につなげたいとしている。</p>
<p>審査講評</p>	<p>本プログラムは、年々子どもの居場所や子育て支援団体は増加しているものの、個々での取組みが多く、企画・運営に団体同士が横のつながりを持つことで、子どもの居場所や子育て支援団体同士の情報共有が円滑になり、子どもや保護者により充実した情報提供を図ろうとしている。子どものお仕事体験を通じ手にした限定通貨を用いたイベント参加による体験格差の解消や、ゲームや子育てイベント、料理教室など、子ども若者や保護者が「やってみたかったけど経済的理由でできなかったこと」を経済的・人力的にサポートし、実現しようとしている。</p> <p>子ども若者の活躍の場を増やすことによる地域活性化をめざしており、社会性・実現性・市民性の観点から高く評価した。</p>

～10万円コース～<6団体>

■チームかなこ（大阪）

出前カフェ～伝えるプロジェクト子育て支援編 障がいがあっても、夢をもって生きられる社会に～

障がいのある子どもの親（家族）、関わる人のおもいが語れる場、共に生きようというメッセージを受け取れる場（カフェ）を開く。

<p>団体の活動内容</p>	<p>当団体は、障がいがあってもなくても、その人らしく夢をもって生きることができる社会をめざし、「つながる」「伝える活動」を行っている。</p> <p>① 講演活動 学校の人権学習、保育士・教員研修、福祉の事業所研修、障がい児の親の会の学習会</p> <p>② 交流会 意見・情報交換を通じて、人とつながりあい、インクルーシブ社会について考えあう時間を創出</p> <p>③ 学習会、イベント開催、相談 研究者・事業者からのヒアリング依頼が多数あり。</p>
<p>応募プログラムの内容</p>	<p>本プログラムは、障がいのある子どもを子育て中の親（家族）、障がい児・者に関わっている方、関心のある市民を対象に、大阪市内・大阪府北部（吹田市）・大阪府中河内（東大阪市）・大阪府南部（和泉市）で出前カフェを開催するものである。</p> <p>入退場は自由で、「相談会」といった堅苦しい形ではなく、おしゃべりできる場や、チームかなこメンバーと参加者が思い・つぶやきを聴きあい、相談・情報交換をめざすカフェタイムの実施、映像「伝えるプロジェクト①暮らし編」などを上映し、かなこさんの生い立ちから歩みの紹介、かなこさんの歩み（母の話）を、必要に応じて提供。地元の子育て支援団体などに広報を依頼する予定である。</p>
<p>審査講評</p>	<p>本プログラムは、親自身が思いや不安を話し、お互いに聴きあい、一緒に考える人（仲間）に出会い、障がい児の親（先輩）の話を聞くことにより、ラクになり、チカラを得て、諦めずに子育てを継続できることをめざしている。</p> <p>相談先や子育て支援施設はたくさんあるが、不安な思いや日々揺れる思いを話すこと、聴きあえる場に出会うことは難しい状況である。カフェの中でサポーターが参加者に寄り添い、話に耳を傾ける中で、子育ての悩み、制度の利用など、個別に相談できる体制を整え、必要であれば他の相談先を紹介している。</p> <p>国連の提唱する「インクルーシブ教育」「インクルーシブ社会」の実現に寄与できる地道な取組みであり、社会性、共感と市民参加、市民主体性の観点から高く評価した。</p>

■NPO 法人南紀こどもステーション（和歌山）

地域子育て支援拠点『ひがしやま』

未就学児や発達に不安のある子と親が気軽に集い、専門職や地域の皆さんとつながりながら過ごせる居場所の開設・運営

団体の活動内容	<p>当団体は、1977年に子どもたちの心豊かな成長を願い、田辺市内およびその周辺地域の保護者により「田辺親子劇場」を設立。2001年より公益的な貢献活動を行うため「南紀こどもステーション」に改名し法人化。集団や異年齢の子どもたちが共に遊び学ぶ場を提供したいとの思いから、体験学習を中心とした活動、および親への支援の必要性を感じて子育て支援に注力、地域ぐるみで子育てを応援できるように取り組んでいる。</p>
応募プログラムの内容	<p>本プログラムは、未就園児のいる家庭、とりわけ発達の凸凹が気になるお子さんや障がい児、および地域住民が気軽に集える居場所を開設・運営するものである。</p> <p>当面は週1回の開放から開始し、運営ルールを整えながら常設化をめざしている。(1回の開放につき5~10組程度の親子の来所を想定)。運営にあたっては職員を配置し、シニア層の子育て応援ボランティアスタッフの協力を得るほか、助産師、保健師、臨床心理士、リトミックや親子ヨガの講師などを招き、楽しくかつ学びのある場、気軽に来ることができる場をつくること、また、課題を抱える家庭については、必要に応じて専門機関や専門職へつなぐ支援も行うこととしている。</p>
審査講評	<p>本プログラムは、親子が気楽に外出し、他者と交流できる機会が増えることで、親の孤立感や精神的負担を軽減し、地域全体の子育て支援力の向上に寄与することをめざしている。</p> <p>未就園児のいる家庭、特に障がいのある子どもを育てている家庭では、「日常的」に親子で行ける場所がなく、自宅に閉じこもりがちになることで、孤立や心身の負担につながる。誰もが行きやすく、安心して過ごせる居場所を整備することで、子育てに関する不安や課題を早期に把握し、適切な支援につなぐことが可能となる。</p> <p>来所する親が将来的に世話役や支援者として関わる循環を生み出すことで、持続可能な運営体制の構築が期待されるなど、社会性、実現性、継続性の観点から高く評価した。</p>

■学生団体 BOLDLINK（和歌山）

商店街に探究活動拠点を！「自分たちの未来」創造プロジェクト

子どもの主体性を引き出し、環境活動をきっかけに次世代リーダーが育つ場づくり

<p>団体の活動内容</p>	<p>当団体は、2023年の「日本の次世代リーダー養成塾」、「次世代リーダー養成サマーキャンプ・TOPPA CAMP」に参加した高校1年生5人が、人や地域を巻き込んで地球環境を守るための活動をしたいという思いが強まり設立。</p> <p>和歌山市磯ノ浦海水浴場でビーチクリーン活動（年8回）を行い、漂着ゴミの分析結果をもとに小中学校や教育フェアで環境出前講座を実施している。現在では都市再生推進法人と連携し、空洞化が進む商店街に若者主体のコミュニティ拠点を新設する事業に挑戦している。</p>
<p>応募プログラムの内容</p>	<p>本プログラムは、都市再生推進法人と連携し、商店街に新設した拠点を「社会課題に挑む若者の活動拠点」として機能させるものである。</p> <p>活動拠点でビーチクリーン分析や出前授業の企画会議を公開で実施。活動プロセスを地域で開き、情報発信を行うことで、①子育て世代や小中学生が「面白そうな若者がいる」と興味を持つきっかけづくり、②環境ワークショップ、地域の大人との対話イベントを定期的開催し、多世代が混ざり合う接点づくり、③子どもたちがBOLDLINKの熱量に触れ、「自分も世界を変える一員になりたい」と思うことで、共に環境保護活動に飛び出そうとする起点づくり、をめざしている。</p> <p>対話と実践を重ね、主体的に未来を切り拓く次世代リーダーを育成し、地域で子育てを応援する温かい輪を商店街から広げていこうとしている。</p>
<p>審査講評</p>	<p>本プログラムは、「社会を変えたい」と願う若者が挫折せず活動を続け、その姿を地域の子どもたちに見せることで、未来のリーダーを育む土壌を作りたいという切実な危機感と期待が原動力となっている。</p> <p>和歌山では中高生が主体的に動ける場が少なく、志を持った若者が継続して集まれる拠点がなく、モチベーションを維持できぬまま活動停止に追い込まれる状況を打破するために、空洞化が進む商店街のガラス張りの拠点を活用し、ビーチクリーンの分析結果や活動パネルを常時掲示するなど、通行する地域住民への視覚的な情報発信を行うとしている。</p> <p>このプログラムを通じ、「活動継続の困難さ」「地域住民との接点不足」を解決するとしており、新規チャレンジ性、社会性、実現性、の観点から高く評価した。</p>

■ラボラトリー・ワーク・グループ大阪（大阪）

街かど実験教室

「すぐにできるもの」「子どもが楽しめるもの」「準備や後片付けが容易にできるもの」を抽出した実験の提供

団体の活動内容	<p>当団体は、東日本大震災の被災地で、理科実験を通じて子どもたちを笑顔にしたいという思いから活動を開始。2018年から大阪府内に活動拠点を広げ、大阪市生野区社協にボランティア団体として登録。楽しい理科実験で子どもたちを笑顔にし、自然に理科リテラシーが育成されることを目的に、子ども向け理科実験教室、親子向け理科実験ショー、一般向け理科実験教室・理科講演などを開催している。</p>
応募プログラムの内容	<p>本プログラムは、代表がこれまで各地域で行ってきた実験教室のうち、「すぐにできるもの」「子どもが楽しめるもの」「準備や後片付けが容易にできるもの」を抽出し、商店街を通る子どもたち（幼児・小学生）に実験を提供するものである。</p> <p>どこにでもある不思議現象を容易に楽しむ場を提供することで、子どもたちに「こんな現象（実験）を体験したな」と記憶を残し、その現象の理由が成長過程（中学生・高校生）でいつか解明され、理科リテラシーにつながることを目的としている。</p>
審査講評	<p>本プログラムは、商店街のイベントに合わせ、商店街を通る子どもたちが参加申し込み・予約をしなくても、通りすがりに実験に参加できる気軽な空間を作りたいとしている。</p> <p>商店街の会場を定期的に変更できるようにしており、持続的に活動を継続できること、また、新たに実験教室を実施できる場所を開拓し、活動する地域を拡げていくことも視野に入れていることなど、社会性、実現性の観点から高く評価した。</p>

■NPO 法人てんやく絵本ふれあい文庫（大阪）

さわってたのしめるてんやく絵本・点字つき絵本展

点訳と絵の形を貼付した「てんやく絵本」と、市販の「点字つき絵本」を紹介する絵本展の開催

団体の活動内容	<p>当団体は、目の見えない代表が我が子に読んでやれる絵本が書店・図書館になく、どうしても子どもと一緒に楽しむ絵本が欲しいとの思いから活動を開始。周りのボランティアの力を借りて絵の形をシートに切り抜き、本文を点訳して原本に貼るという形で「てんやく絵本」を制作。冊数が増え、この喜びを他の目の見えない親御さんにも味わってもらいたいとの思いから小さな貸出し文庫を開設した。</p> <p>現在では、水～土曜日の午後に「てんやく絵本」の制作と貸出し、「てんやく絵本」製作者の指導育成、および国内各地で巡回展などのイベント活動を実施している。</p>
---------	---

<p>応募プログラムの内容</p>	<p>本プログラムは、ボランティアの手作業によって市販の絵本の文章を透明なシートに点訳し、絵の部分も同じシートで輪郭を切り抜き、それぞれ文字と絵のところに貼り、さわって楽しめる「てんやく絵本」と、製作段階で透明な樹脂インクで点字を添え、絵の形を盛り上げてさわれるようになっている出版物「点字つき絵本」、これらの絵本に加え、「てんやく絵本」誕生の経緯について解説した展示パネルなどで紹介するイベントを開催するものである。</p> <p>この取組みを通じて、多くの方に「てんやく絵本」「点字つき絵本」について知っていただく機会になることをめざしている。</p>
<p>審査講評</p>	<p>本プログラムは、多くの人と一緒に楽しめる絵本の存在を知らないこと、また知っていても実際に手にしたことがない人が大半である「てんやく絵本」「点字つき絵本」について、“知っていただく機会”を設けるものである。</p> <p>HP や X、新聞掲載で存在を知る機会は増えているものの、未だ不十分であり、知っていれば必要とされる潜在的読者が利用機会を逃すという現実もあるため、周知することでお届けする確率を上げようとしている。</p> <p>見える方にも点字に親しむことで、白杖・点字プレートなどへの意識の変化や、配慮・サポートの声掛けなどに対するハードルを下げ、見えない方への隔たりを感じにくくなる効果が望めるなど、継続性、新規チャレンジ性の観点から高く評価した。</p>

■Teenagers’ Free! Theater (兵庫)

ちょっと学校に行きにくい 10 代のための演劇サークル TFT 第 21 回演劇公演
 演劇活動を通じて、子どもたちの創造性や感性を向上し、自己肯定感を高め、自分の将来に向かって一歩踏み出す力を育む

<p>団体の活動内容</p>	<p>当団体は、学校に行きにくい子どもたちが演劇などの表現活動を通じ、信頼できる人間関係の構築や舞台でやり遂げた自信を持つことで、前向きに変化していく姿を見た経験をもとに、課題を抱えた子どもたちが安心して集える居場所を学生と地域の社会人でつくり、大学の課外研究プロジェクトに応募し、2005 年より活動を開始。</p> <p>「ちょっと学校に行きにくい 10 代のための演劇サークル」として活動を実施している。</p>
<p>応募プログラムの内容</p>	<p>本プログラムは、11 月または 12 月に演劇公演を開催するものである。</p> <p>5 月に参加者を募集、おおむね 2 週間に 1 回のペースでの活動を通じ、自己表現が苦手な子どもたちとのコミュニケーションを深め、オリジナル台本の作成し、公演に向けた練習を行う。本物の劇場の舞台で公演を実施することで、その成果を観客に見ていただき、子どもたちの自己肯定感を高めることにつなげたいとしている。</p>

審査講評	<p>本プログラムは、演劇を含めた芸術を通じて、思考の幅や深さを拡大させ、感動することによるストレス解消、創造性や感性を向上することで、多くの人との人間関係を学び、築いていくとしている。</p> <p>本物の劇場の舞台に立ち、150人ほどの観客の前で公演をやりきることで、子どもたちは大きな自信が得られ、自己肯定感が高められること、また地域の多くの方々に公演を見てもらうことで、不登校問題を考えてもらうきっかけづくりとなり、実現性、市民主体性の観点から高く評価した。</p>
------	---